

北鳥池遺跡出土土器の再整理

芋 本 隆 裕

I はじめに

ここに紹介する北鳥池遺跡出土の土器は、周知のように昭和39年6月に府営枚岡ポンプ場の工事中に発見され、同時に行なわれた緊急調査によって出土したものである。これらは調査後、東大阪市教育委員会にて保管しているが、調査の概要は昭和45年に府立花園高校地歴部の活動成果としてまとめられた「河内古代遺跡の研究」^①のなかに収載され、上層の布留式土器に対して下層の弥生土器は、庄内式土器に近い形態から後期末のものと報告された。その後昭和49年、都出比呂志氏によって中南河内地域の弥生第5様式土器の編年案が公表された際には、これらの弥生土器は第5様式末における氏の土器論の基準資料としての評価が与えられ、以後の弥生時代後期～古墳時代前期の土器研究に大きな影響を与えていた^②。

また近年には、畿内の弥生第5様式～古式土師器を扱って精緻な編年細分が行なわれている論文や報告書も増加しており、そのなかで北鳥池遺跡下層出土土器は弥生末とするか古墳時代初めとするかで相違はあっても編年上の年代観についてはほぼ固定化したような感がある。これは甕にみる胴部球形化が、技術的には都出氏の「連續ラセンタタキ技法」を伴ってすすんでいく過程からみれば、現状では最もよく庄内式甕の出現を論理的に説明する素材であるためであろう。

しかしながら、逆にみれば球形化があまりにも進んでいることは、河内地方とともに胴内面を削る甕を出現させた大和の併行期と推定されるものとの形態的な違和感もあり、また河内地域においても第5様式～庄内式の土器が発掘調査によって少しづつ増加するなかで、ひとくわ個性的な存在となりつつある。このようなことから、当該時期の実態を再度整理、検討しておくことも無意味ではないと思われるようになってきた。本稿では、まず花園高校地歴部による報告書刊行後10年を経た北鳥池遺跡出土土器の観察を再度行なった後、中河内における第5様式後半～庄内期の土器を都出氏の土器論を基礎として主に甕形土器の成形過程変遷観を問題にしていきたい。

II 出土遺物

報告書によれば、土器は3つのグループに分けられている。このうち布留式に属する(Ⅲ)は上層より出土したものであり、第5様式末～庄内式とみられる(Ⅰ)、(Ⅱ)は下層より出土した

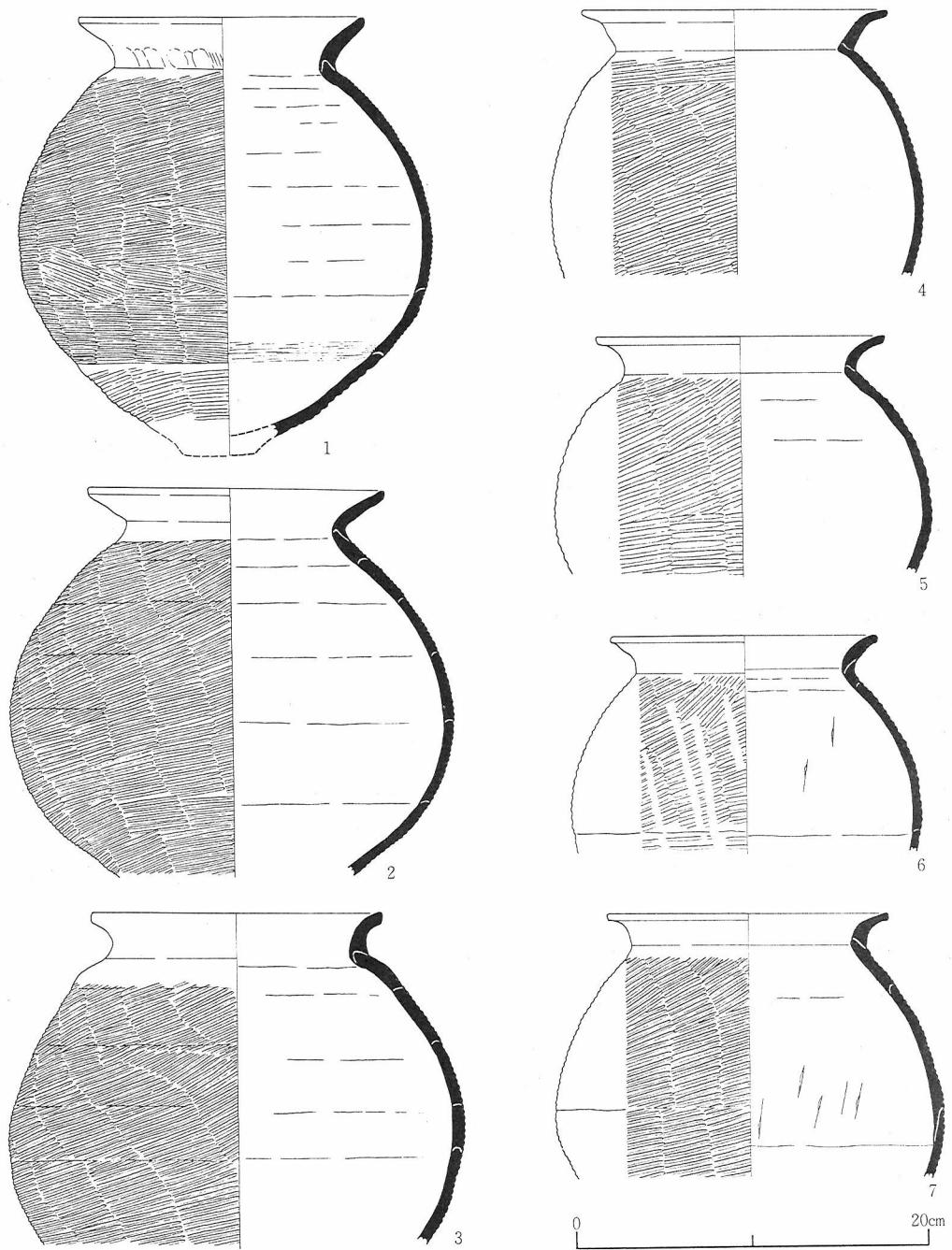
ものであるが、(I)と(II)の包含層内での出土状況が不明であることから両者が分層される可能性も保留されている。

下層出土の土器は、甕、壺、鉢、有孔鉢、高杯、手焙形土器から成り、報告書とは重複するが図示できるものの大部分を掲載した。これらは、完形ないしはそれに近い形に復原できるものと器形が判別できる程度の少量の破片とに比較的明瞭に分かれる。このことは完形に近い土器を中心として包含層内における時期の接近した遺物のあり方を示すものかと推測される。なお、胎土は搬入品としたもの以外すべて生駒西麓のものを使用している。

1. 観察

大、中形甕1～7 大形甕1～3は底部あるいは胴下部を欠くものの残存部全体の接合復原がかなり出来るものである。器形は、胴部が著しく球形化したもので、1・2は器体中位に最大径があり、3ではむしろ下ぶくれとなって器体中位よりやや下に最大径がある。口縁部は1・2では外反した後端部でわずかに上方に肥厚し、3では短かく外反して端部は丸くなつておわっている。いずれも口縁部のヨコナデは丁寧と言えるものではない。1のように指圧痕やハケメが残るものもある。これらの甕の製作過程は、器体に残された粘土紐の接合痕から次のように観察される。最も残りのよい1については、接合痕の残る箇所は推定底部より上へ器高約5cmのところに1ヶ所、この部分から器高で4cm上がった最大径下にもう1ヶ所、そしてこれより上へは2cm～1cm幅の間隔で粘土紐痕が続いている。そのなかで器高5cm付近の接合痕は、これを境に2.5本/cmから3.5本/cmへのタタキメ原体の違いや器体外面に鈍い段がめぐることなどからみて、まず最初に作られたこの逆円錐台形部分で上方を支えることができる強度をもつまで乾燥を行なったことがわかる。その上に粘土紐を積み上げてタタキを行なうながら幅4cm程の帯状部を形成し、最大径下で若干の乾燥を経た後、いっきに粘土紐積み上げとタタキを併用しながら胴上縁まで形作ったものとみられる。胴内面には、逆円錐台部と以上との境にヘラ搔きが認められる他はナデ調整による。2・3については、胴下部の逆円錐台形を呈する成形第1段階が明らかでないが、2のように胴下半内面の接合痕に対応する部位においてもタタキメ原体(2・3とも3.5～4本/cmのタタキメ)ならびに主軸の傾きに明瞭な一線がみられないことからは、1のように逆円錐台部と以上とが製作の工程の違いにもとづくかなりの時間的経過を認めるものではなく、同一の製作工程のなかで逆円錐台部の製作から短時間の乾燥後の連続的な成形が行なわれたものと推定される。このような成形の連続化によって、胴部の形状も粘土の自重によって最大径部が下に降りた2から3への傾向が理解される。以上のものはいずれも器厚0.6～0.7cmをはかる厚手の甕である。

4～7は、胴上半部の破片で全体の $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{4}$ のものを図上復原した。このなかには7のように大形に近いものと4～6のように中形に近いものとがみられるが、胴下半を欠くため法量は定かでない。器形は、腹径/口径比でみると4～7そして1～3の順で1.22～1.57へと増しており、第5様式的な長手の甕から次第に球形に近づいていく。そのなかで、7は1～3に形状も近くタタキメも3.5本/cmの細筋であること、そして連続成形を行なう範囲についても最大径部の接



第1図 弥生土器 中、大形甕(a)・(b)実測図

合痕でタタキメ主軸が変化することなく連続的に行なわれていることからみて、4～6とは成形技法の発達過程のなかで一線がひけることから、4～6を(a)、7・1～3を(b)として分けておきたい。これと同じ基準でみれば、先の大形甕1～3も1と2・3の間でさらに(b₁)、(b₂)と細分することができよう。その他の特徴としては、口縁部の成形がいずれも貼り付けであること

と内面調整にハケが用いられないことなどが挙げられる。

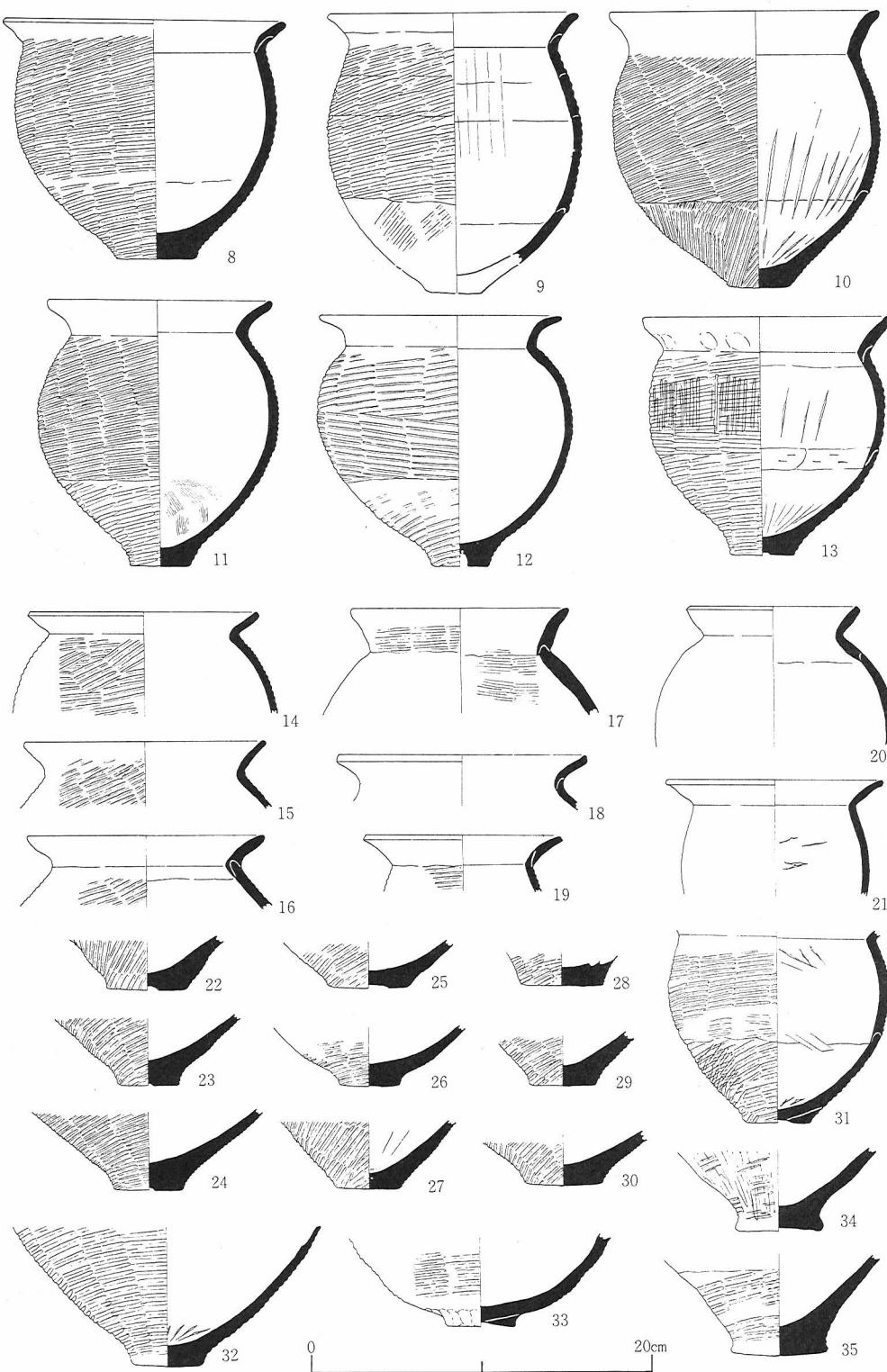
小形甕 8～13・31 これらは完形ないしはそれに近いものである。器形は、(a)肩部が張り重心が中心よりやや上にある11～13・31と、(b)胴部全体に張りがなく重心が中心ないしはやや下にある8～10とに分けられる。このうち(a)は口縁が「く」の字に外反し、(b)はゆるやかに外反する。また、底部には輪台状粘土紐を貼り付けたものと円板状粘土を貼り付けたものとがあり、胴部の形状との関係では(a)の4個体中3個体が輪台状で(b)の2個体いずれもが円板状でほとんど突出しないものである。このように、胴部形状を重心の位置を基準として分けた2類は、口縁の外反度や底部の形状についても違いが認められ、底部成形の方法にも及ぶ可能性がある。以下(a)、(b)各類ごとに個別観察を行なっていきたい。

(a)11はやや長手の胴部に「く」の字に外反する口縁部が付く。器高の1/3を占める逆円錐台部は底部が突出し、外面は2.5本/cmのタタキメ、内面は乱ハケメ。接合部以上は3.5本/cmの細いタタキメとナデ調整による。12は球形胴に外反した後、再び水平方向に外折する口縁部が付く。器高の1/3を占める逆円錐台部の底部は、輪台による上げ底となっている。タタキメは逆円錐台部が3本/cmの幅広の溝をもつもので、以上は2.5～3本/cmの細い溝で原体は異なる。内面は全面ナデ調整。13は球形胴に端部つまみ上げ状の外反口縁が付く。逆円錐台部は器高の2/3を占める比較的割合の大きいもので、輪台状の突出する底部となる。外面は同一原体による2.5本/cmのタタキメが右上りと一部垂直方向に付き、内面は接合部のヘラ搔きとその他をナデにより調整する。31は小形球形の胴部で口縁を欠く。底部は輪台状粘土を貼り付けるがほとんど突出しないものである。外面のタタキメは逆円錐台部が3本/cm、接合部以上は3.5～4本/cmのもので、内面はヘラ+ナデによって仕上げる。

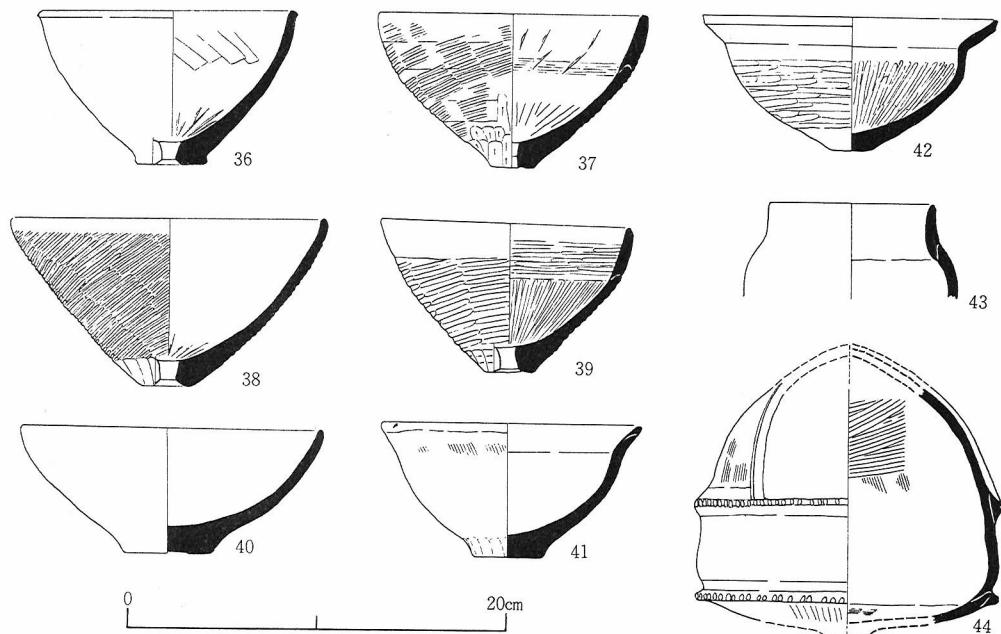
(b)8は器高が低いわりに幅広の胴部に、短かい口縁部と平坦でほとんど突出しない底部が付く。タタキメは3本/cmの同一原体で、口縁中途までは「叩き出し」による。底面には2次焼成による赤変が認められる。内面調整は不明。9は下ぶくれの胴部にわずかに外反する口縁部が付く。底部は欠いている。タタキメは2.5～3本/cmの同一原体で、内面にはなで上げをみる。10も同様な器形。器高の1/3を占める逆円錐台部は、平坦面をもつだけで突出しない底部をもつが正立不可である。逆円錐台部外面には、溝の長さが5cm程ある3.5～4本/cmのタタキメがラセン状に付いている。これは接合部以上の3.5本/cmのものと原体が異なっている。内面はヘラ+ナデ調整による。

中、小形甕口縁部14～21 いずれも単純に外反するもので、胴外面に3.5～4本/cmのタタキメが付くものとナデ仕上げのものとがある。17は乳赤色を呈し、胎土からは搬入品とみられる。

底部22～30・32～35 いずれも突出度があまり大きくない平底で、輪台状の粘土紐の痕跡をもつ22～26・33と、円板状の平坦な底部の27～32・35がある。輪台状の底部33は、丸底に輪台部を付け足した恰好であることから、平底のなかでは最も新しい部類と考えられる。これらの底部は底径の小さいものが多く、タタキメは3.5～4本/cmの細筋が大半を占め(28・32・33は3本/cm)、底部近くまで密に叩かれているのが特徴である。また、胴部への立ち上がりは総じて外弯



第2図 弥生土器 小形甕(a)・(b)、中、小形甕口縁部、底部実測図



第3図 弥生土器 鉢(a)・(b)・(c)、有孔鉢(a)・(b)、手焙形土器実測図

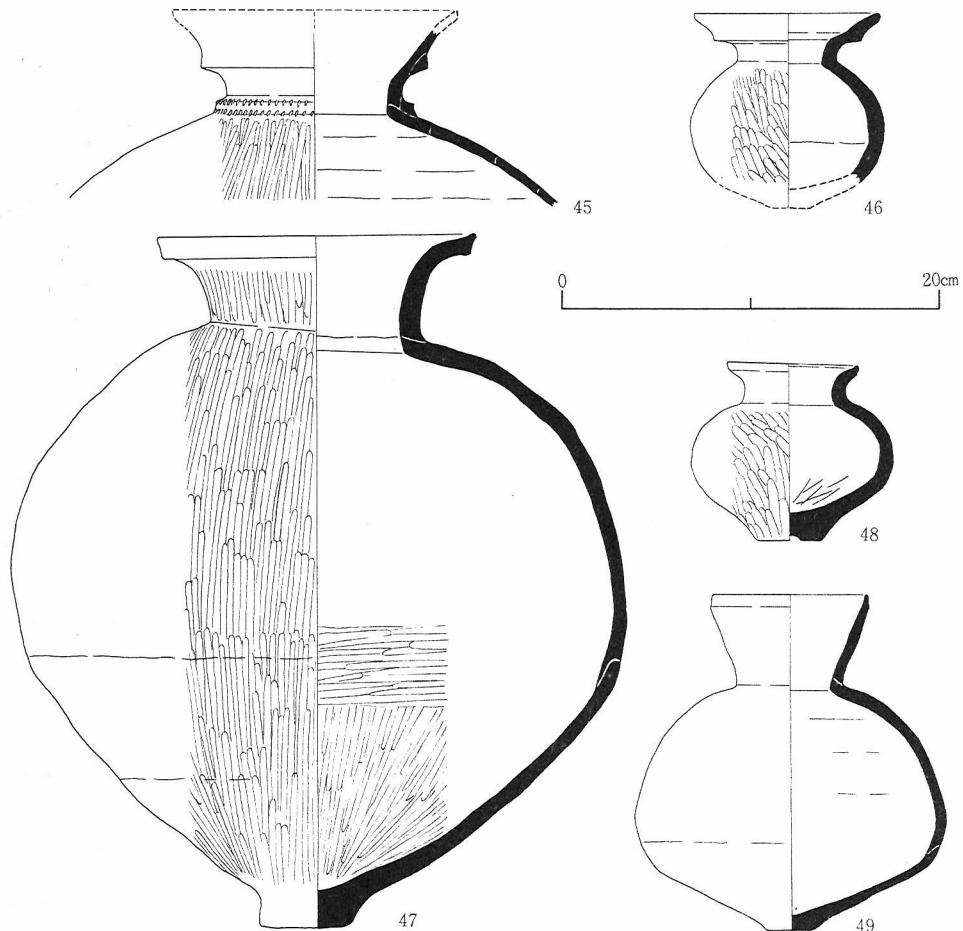
度が大きく、球形胴ないしはそれに近い形態に続くことがうかがえる。従って、大形甕(b)の底部もこのような小平底であろう。

鉢40~43 (a)平底の40・41と、(b)尖底ぎみで小さな平坦面をもつ42がある。また(c)直立する短い口縁に椀状の体部をもつ43も出土している。(a)のうち40は体部の外弯度が大きいもので、大形甕1の逆円錐台と同様の器形であり、41は第5様式に通有の器形である。いずれもナデ仕上げによる。(b)の42は報告文では(II)のグループとして庄内式甕や2重口縁壺と同列に扱われているが、有孔鉢の削り底や直口壺の尖底ぎみの平坦底と同様に大型甕(b)などと併行するものとみておきたい。口縁部は外反口縁の端部をつまみ上げ状にヨコナデすることで上方に稜、外側に面を作る。なお、報告書で図示された手づくねの平底鉢は図化しなかった。

有孔鉢36~39 (a)平底に穿孔した36と、(b)外面下端を削って尖り底状にしたものに穿孔をもつ37~39がある。(a)は第5様式に通有の器形でナデ仕上げ。(b)は37・38が3.5本/cmのタタキメと内面ヘラ+ナデ調整。39が2.5本/cmのタタキメと内面ヘラミガキで仕上げている。37・39の内面の接合痕以上は有孔鉢の器形に作るための付け足しであり、甕の逆円錐台と共に通する部分はこれより下である。鉢、有孔鉢は43以外完形ないしはそれに近いものである。

手焙形土器44 器体の形状が大まかに知ることができる程度の、全周の1/3程の破片である。体部に2条の刻目凸帯がめぐり、底部は小平底ないしは平坦面をわずかに残すものと推定される。覆い部分と腰部内外に細粗2種のハケメがみられる。灰褐色を呈し、胎土からは搬入品とみられる。

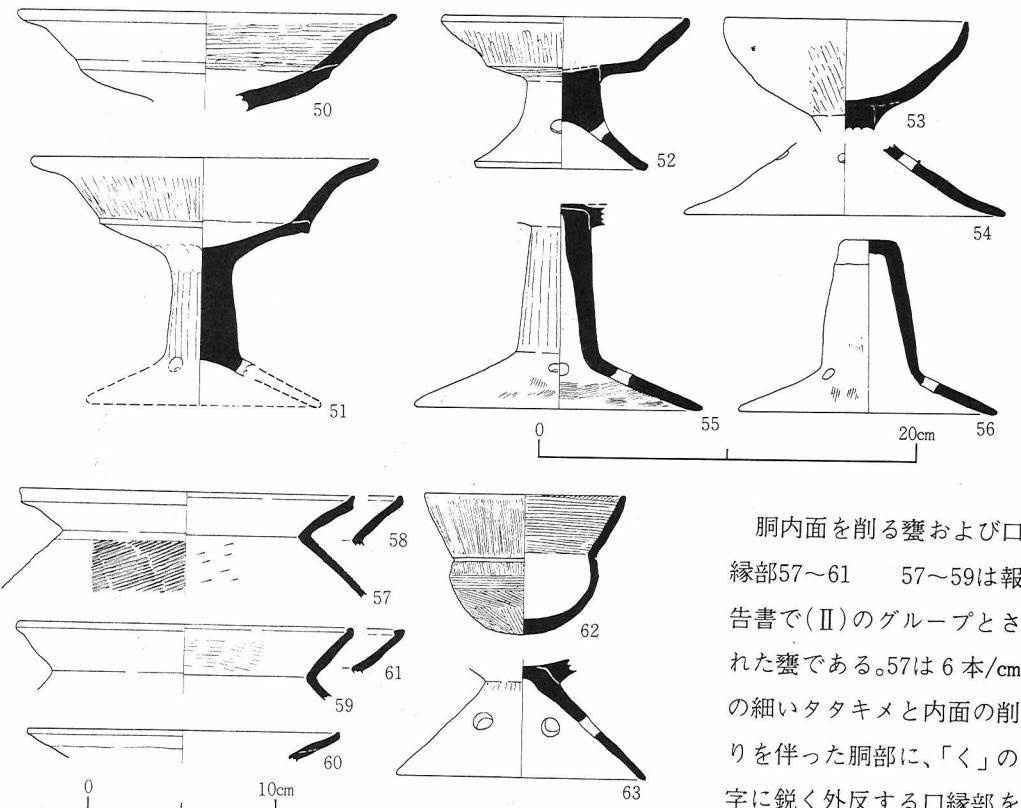
壺45~49 広口壺47・直口壺49・2重口縁壺45・ミニチュアの広口壺48と2重口縁壺46が



第4図 弥生土器 広口壺、直口壺、2重口縁壺実測図

あり、2重口縁の2個体以外はほぼ完形である。広口壺は突出した平底に肩が張る球形胴をもち、ゆるやかに外反する口縁部は端部外側に面、上方に肥厚をみるが施文はない。外面全体と内面下半はヘラミガキ、内面上半はヘラナデ調整により平滑である。胴部には粘土紐の痕跡とみられる凹凸がある。直口壺は重心の位置が下にある腰張りの胴部に、わずかな平坦面をもつだけの尖底状底部が付く。口頸部は外上方にのびた後、端部でつまみ上げ状のヨコナデによって上方に稜、外側に面を形成する。器表荒れのため調整痕は不明。2重口縁壺は胴部と頸部の境に刻目凸帯をめぐらせ、口頸部にも断面三角形状の凸帯を貼り付けることによって外側からみて2重口縁状に仕上げている。他に文様らしいものはみられない。ミニチュア2重口縁壺は灰褐色を呈し、胎土からは搬入品とみられる。

高杯50~56 中実の脚柱部と杯口縁部が長く外反するものと、楕形の杯部に脚裾部が外に大きく開くものとがある。このうち後者は、次代の半球形杯部に裾広がりの脚をもつ高杯の祖形と思われる。外反口縁をもつ杯部は、51・52が外面に、50は内面にヘラミガキを行なうが全体の調整はあまり丁寧ではない。55・56は上層出土。精良な胎土で作られている。



第5図 弥生土器 高杯、庄内式～布留式 蔵、
小形丸底土器、小形器台実測図

胴内面を削る蔵および口
縁部57～61 57～59は報
告書で(II)のグループとさ
れた蔵である。57は6本/cm
の細いタタキメと内面の削
りを伴った胴部に、「く」の
字に鋭く外反する口縁部を
もつ蔵で、口縁端部はつま
み上げ状の肥厚が顕著であ

る。58も角閃石を含む茶褐色の蔵である。これに対して、59～61は口縁端部が丸みをもって上方ないしは内面に肥厚するもので、胎土は橙褐色ないしは灰褐色を呈し、角閃石は含んでいない。

小形丸底土器62 扁球形の体部に外上方に内弯してのびる口縁部から成る。口縁部と体部の境にはヘラ状のものによる沈線がめぐり、その他は細粗2種のハケで調整されている。胎土には角閃石を含む。上層出土。

小形器台63 明橙色を呈する精選された胎土による布留式の器台である。出土層位不明。

2. 整理

以上観察してきた土器のうちで大・中形蔵、小形蔵、鉢、有孔鉢では(a)、(b)2類に分けることができた。この(a)、(b)は、第5様式的な要素をより濃く残す(a)と、次代指向の要素が多い(b)との区分ともなっている。まず大形蔵(b)は外面細筋タタキ、内面ナデを基本調整法とする弥生第5様式系の蔵のなかでは最も胴部球形化が進んだものである。小形蔵(b)もまた重心が中心より下ることや逆円錐台部の外弯度が大きいことなどに大形蔵(b)と相通じる面をもつ。これらに対して、鉢および有孔鉢では平底の第5様式的なものに混って尖底指向の鉢(b)や削りによる尖底の有孔鉢(b)などが認められており、この段階にはすでに丸底指向が始まっていたことがわかる。また、蔵の底部のなかには、平底でも正立不可のものも多く、底面に2次焼成を認めるものの

⑤ 存在や丸底に輪台状粘土を巻きつけて平底状にしたもの等などからみて、これらの甕も年代上はすでに丸底指向の段階にありながら、一方で根強い平底への愛着から第5様式系土器への固執があったものと推察される。壺では尖底ぎみの直口壺や2重口縁壺が、これらとの同時代性を表わすものとなろう。高杯も中実脚と杯口縁の長大化や椀状杯部に裾広がりの脚など、器形的に過渡的な段階に位置している。これら(b)類が代表し、(a)、(b)全体としても明らかな時期差としては把えにくい、比較的短期間に形成されたと考えられる資料=北鳥池下層式の内包する問題点については次に考察していきたい。

Ⅲ 中河内における第5様式土器編年の現状と北鳥池下層式をめぐる問題点について

1. 都出編年とその後

中河内における第5様式～庄内式の甕は、都出氏によって西之辻I式、西之辻E(D)式、上六万寺式、北鳥池下層式、上田町1式、上田町2式の6期に編年されており、北鳥池下層式と上田町1式の間で様式区分がなされている。これらの諸型式のうち西之辻I式とE(D)式、上六万寺式については、都出論文発表後も併行関係を有する資料が増加しつつある。

まず西之辻I式では、やや先行する中期的な形態の土器を含んだものが東大阪市東山町1265番地から検出された他、若江遺跡下層や芝ヶ丘遺跡などからも同様な段階の土器が一部出土している。これらの土器は、西之辻I地点例のごとく全面ハケ仕上げの甕ばかりではなく、外面をヘラ削り+ヘラミガキで仕上げたもの（東山町例、芝ヶ丘例）やタタキメを残すもの（若江下層例）等があって甕の調整には画一性に欠ける点がむしろ特徴と考えられる。それとともに、第5様式に典型的な逆円錐台形の甕下半部も、全体の成形に先行して逆円錐台部を大量に製作する工程が未だ確立されていない段階にあり、西之辻E(D)式や上六万寺式期にくらべて甕上半部との境で成形痕や調整痕の明確な一線を認めにくい状態にある。西之辻I式は、いわば第5様式的な成形法の搖籃期である。

西之辻E(D)式では、この時期単独であると考えられるものはその後も出土していないが、^⑨比較的まとまりをもつ資料としては、鬼塚遺跡D地点(HO 3・4地区)出土例がある。この段階は第5様式的な成形法の発達期にあたり、逆円錐台形の成形第1段階を先行して大量に生産する方法が確立した結果、西之辻E地点例のように成形時の接合痕にもとづいて3段階にタタキメ主軸が変化する特徴も出現するようになるが、鬼塚D地点などでみる限り口縁部は貼り付けによる例が大半で、次期のごとく体部からの「叩き出し」によるものは少ないようである。現在のところ、この段階は胴部や口縁部の成形法の発達や細筋タタキメの有無等で次期と違いを認めるが、成形技法の発展論的には一線で画しにくい要素もある。

上六万寺式は、甕では細筋のタタキメをもつ小形甕の存在と口縁端部のつまみ上げ形態のヨコナデ調整に特徴がある。しかし上六万寺遺跡出土遺物は、ほとんどが口縁部と底部の破片であることから、胴部成形の方法を推定することは困難であった。^⑩その後、昭和53年に調査を実施した鬼塚遺跡E地点で、上六万寺式併行と考える土器が竪穴埋土内及び包含層より出土した

結果、成形技法についてもこの段階の傾向が認められるようになった。それによると、鬼塚E地点の甕は、成形過程に占める逆円錐台形部の役割が極めて大きなものであり、大形、中形、小形のいずれもに共通する法量の逆円錐台部を用いて、大形～小形の法量、器形の決定は成形第2段階以上の粘土紐積み上げとタタキの過程で行なう方法が用いられている（第6図参照）。このうち大形甕では西之辻E式と同様の2度の成形休止部分を、中、小形甕では逆円錐台部以上連続成形を基本的な成形法として、形態的には互いに相似の関係をなしていることが注目され、長頸壺など他の器種に同様の逆円錐台部を使用した例も認められる。また、口縁部の「叩き出し」成形が大半を占めること（約80%）や、タタキ技法の発達による連続成形範囲拡大化も認められ、器高22.8cm、腹径20.9cmの比較的大形の甕でも逆円錐台部以上の連続成形によって球形胴を呈する器形を生じている。そのほか小形甕を中心として3.5～4本/cmの細筋タタキメが認められることや、小形甕の口縁部を「叩き出し」のちユビオサエする程度の簡略な調整による例もこの段階以後の特徴に加えることができる。これらのことから、鬼塚E地点の土器では逆円錐台部の先行生産と法量や器種の異なるものへの共通利用による相似形態の土器の量産化、及び口縁部の「叩き出し」成形やタタキ技法の発達に伴う胴部の連続成形範囲拡大化の萌芽が認められる、いわば第5様式的成形法の確立期といえるであろう。

他に鬼塚E地点併行の土器として馬場川遺跡1・2号井戸出土のI類の一部が挙げられる。^⑭これらは昭和51年に行なった緊急調査の結果、2基の井戸状遺構より庄内式を含んだ供献土器等と出土したものであるが、調査が工事中のものであったために複数の型式を含んだ土器群の出土層位や状況について明らかでない点を含んでいた。従って、報告書では出土状況、層位において併出が確認された土器に平底と丸底で内面を削る甕とが混在していたことから、比較的短期間の所産とした上で第5様式的なものをI類、第5様式以降の要素をもつものをII類と大別した。しかしこの大別ではやや漠然とした感をもつことから、さらに2つに細分することが必要となったので、ここでI、II類をa、bに分け、I類では胴内面を削る甕60・62と同一層内にある平底で胴内面にかるいヘラ削りを行なう大形甕63、出土状況では他のI類と混在するが新しい要素をもつ尖底の中形甕64、下ぶくれ胴の大形甕65（いずれも報告書図面5右列）、胴内面をかるく削る小形甕42をIb類として分離して他をIa類とした。このIa類が鬼塚E地点の土器と同様、中、小形甕に相似の関係が認められ、細筋のタタキメを有す小形甕の口縁が「叩き出し」のちユビオサエのみの雑な調整であること等で同じ傾向をもっている。

こうして都出論文発表後の上六万寺式の内容はその後の資料増加によって豊富なものとなってきた。そして、甕においては連続成形範囲の拡大傾向をみる鬼塚E地点例から北鳥池下層土器との技法上の距離は接近し、また上六万寺、鬼塚E地点、馬場川井戸等の壺や高杯の複数形式の存在からは、少し時間幅をもって考えるのが妥当かと思われる現状である。

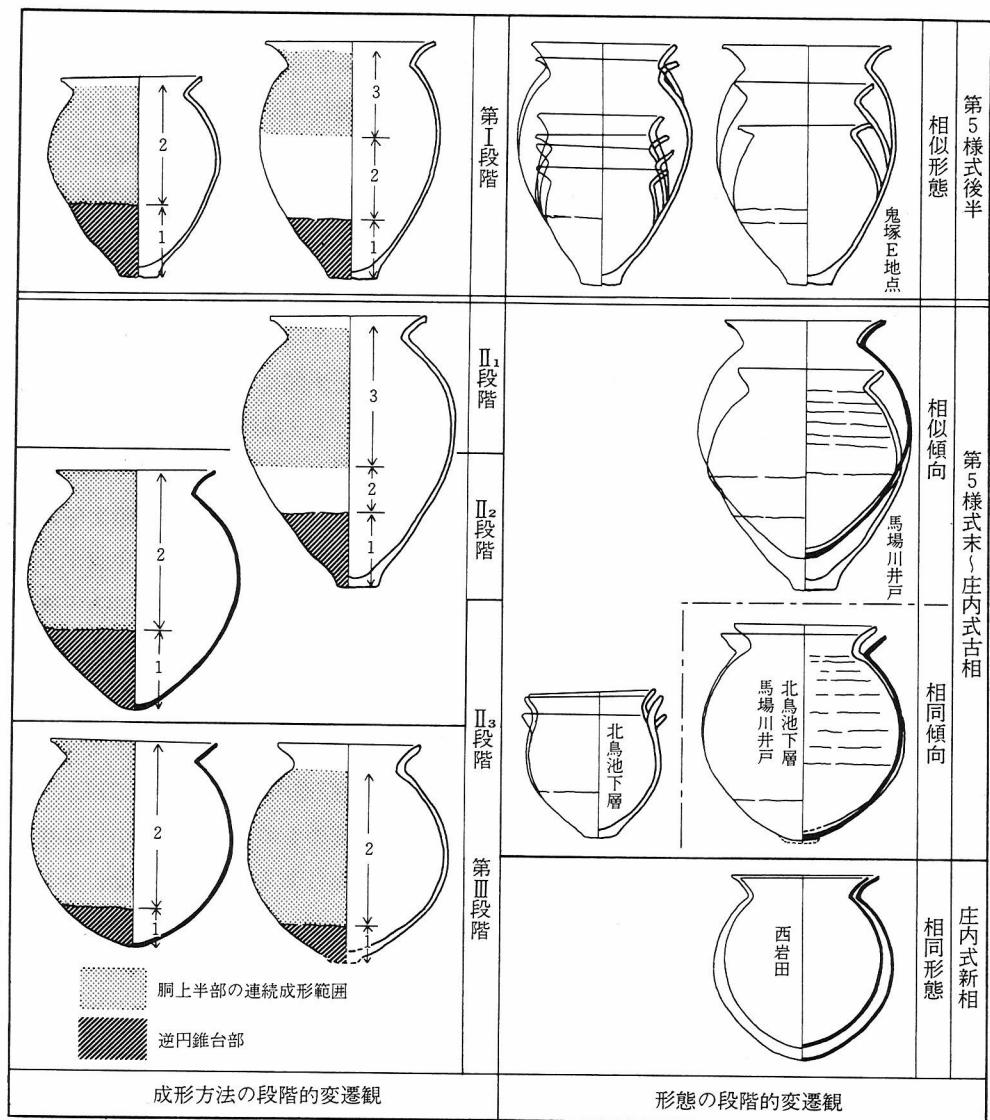
以上の諸式に対して、第5様式最終末に位置づけられた北鳥池下層式については、馬場川井戸Ib類が内面ヘラ削り出現時の第5様式系土器として北鳥池下層式ともある程度の共通性が認められるはずであるが、実際にはかなりの差が存在している。また、柏原市船橋遺跡第9ト

⑯ レンチ土塙より一括出土した土器群も、同様な形式の高杯を出土しながら甕では胴が細身で長手のものや尖底でも胴に張りのないものを含んでいて、やや趣きを異にしている。これらの近接した時期の土器にみる違和感については、タタキ技法の発達による「連續ラセンタタキ技法」の出現と、これらの効果によるとされる胴部球形化の過程を段階的により詳しく検討する必要があると思われる。そこで、甕の胴部成形法の変遷を逆円錐台部と以上の胴上半部とに分けて位置づけていくことから問題点を整理していきたい。

2. 段階論的変遷観

ここでは第5様式後半～庄内式新相までをⅢ段階に大別し、さらに第Ⅱ段階を3つに細分して先述した第Ⅰ段階以後の特徴を整理する(第6図)。まず胴上半部については、Ⅱ₁段階は馬場川井戸Ⅰ(b)類の甕63のように大形甕の成形は鬼塚E地点と同じく3段階に分かれるが、最上部の連續成形範囲が拡大した結果、肩部が半球形に張り出す器形が現われる段階、Ⅱ₂段階は同井戸Ⅱ類を(a)、(b)に分けたうちの(a)類甕60のように、先に達成されていた半球形の胴上部に尖底ぎみの逆円錐台を付けて体部2段階成形とすることで庄内式のプロポーションが完成する段階、Ⅱ₃段階は同じ2段階成形でも連續成形範囲のいっそうの拡大化によって北鳥池下層の大形甕(b)や馬場川井戸Ⅱ(b)類甕61のように逆円錐台部の縮少、退化と球形胴、丸底化の進展傾向をみると至り、第Ⅲ段階に継続する変遷が考えられる。一方、逆円錐台部については、Ⅱ₁段階で鉢状部の外弯度が大きくなり(擬口縁径/逆円錐台部高=2.0以上)、Ⅱ₂では庄内式甕の下半部を構成する、より外弯度の大きい尖底ぎみのものが加わり(擬口縁径/逆円錐台部高=2.2以上)、Ⅱ₃では平底、尖底の両者とも外弯度は進むが高さを縮少した小形のものとなり、ついには成形第2段階とタタキメ主軸の傾きで判別することも困難となる方向にある。第Ⅲ段階は、タタキメの上に密なハケ調整が加えられて接合部は観察できないものの、基本的にはⅡ₃と同様の逆円錐台部の目立たないものである。^⑯

このようにみれば、第5様式末～庄内式古相の甕は、逆円錐台部をできる限り各器形に共通利用する第5様式的成形法の衰退と、これに対する連續成形部分の拡大化という相反する2要素が絡み合って甕のプロポーションが決定されていると考えられ、それが船橋遺跡の尖底甕や北鳥池下層の大形甕(b)のごとく丸底指向がすなわち球形胴に結びつかなかったりその逆もまたみられる理由となり、球形胴、丸底、内面ヘラ削りへと画一的に移行しないこの時期の実態を表わしているものと思われる。そしてこのような段階的変遷は、実年代上は船橋遺跡の土塙一括資料にみるⅡ₁～Ⅱ₂段階と北鳥池下層大形甕(b)のⅡ₃段階とが、同様形式の高杯の存続期間内におさまることや、馬場川遺跡井戸一括出土のⅡ₁段階の器形を示す63とⅡ₂段階の60とがともに内面ヘラ削り技法を用いる時期の所産であること等を考慮すれば、現状では明瞭な一線で画しにくい短期間における重複しながらの変化であるとみられる。それゆえ、特に年代観が固定している北鳥池下層の土器についても、第5様式系の土器のなかでは最も新しい段階であることは異論はないが、連續成形の発達段階からみればすでに庄内式古相の連續成形を凌駕し、底部の形状からは丸底指向のものとの併存も予測できることから、あえてこのような段階論的



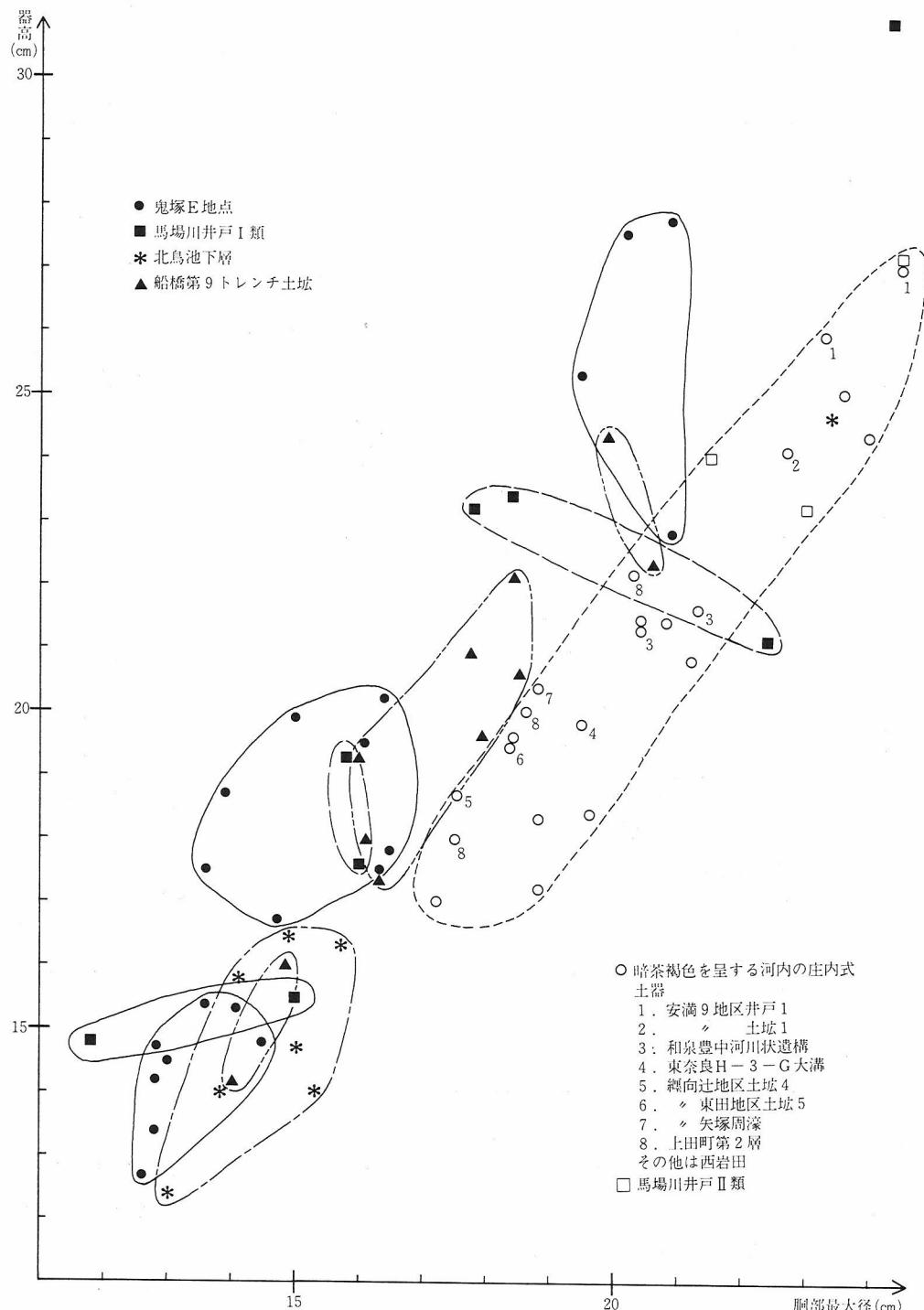
第6図 第5様式～庄内式土器の段階的変遷観

な位置づけを行なって今後の実年代論や系譜論の課題としたい。

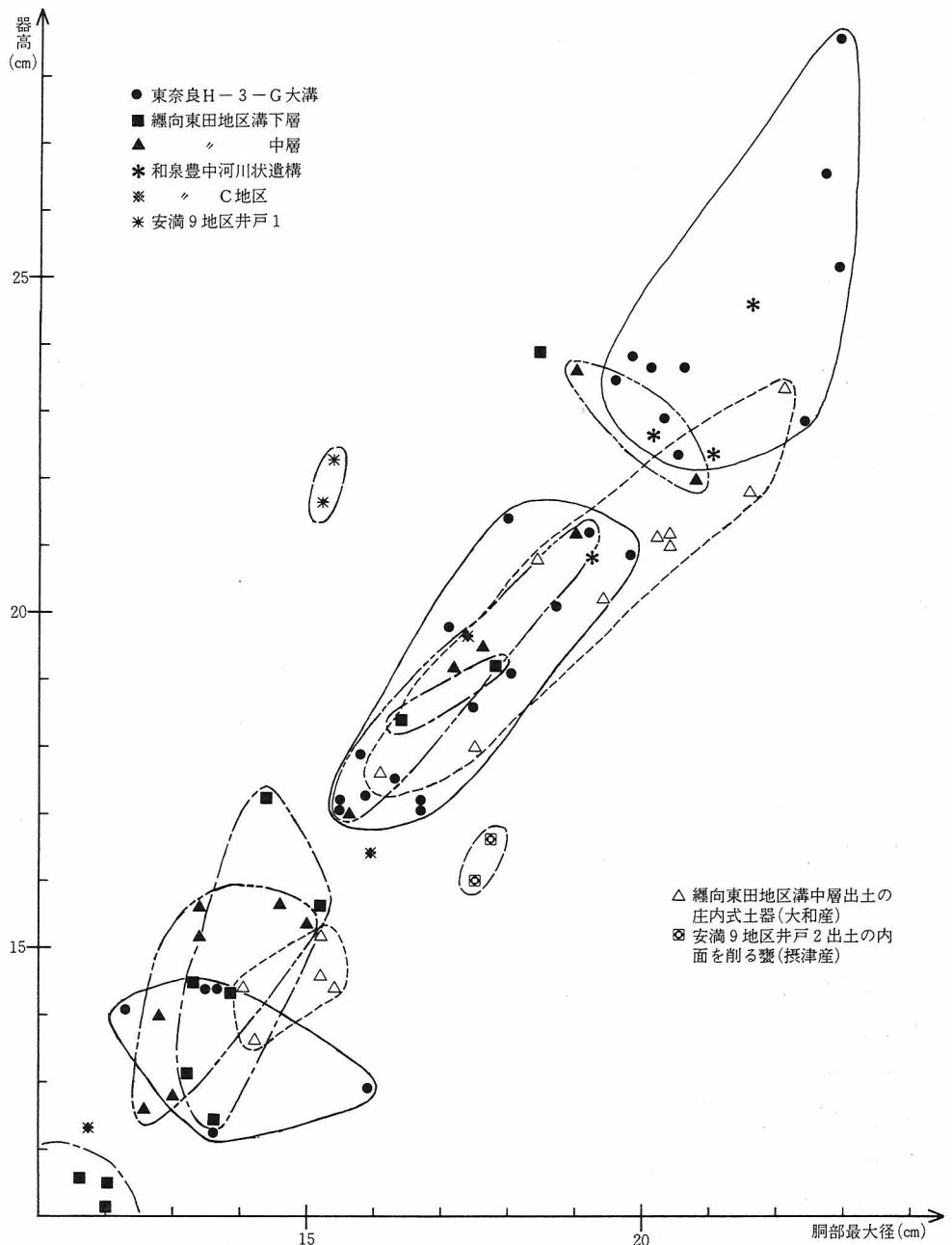
2. 形態変化の法則性

以上の段階的な変遷によって成形法が確立されていった庄内式甕は、先に鬼塚E地点の土器の相似形態にみられる完成度の高い成形法と比較して、土器相互にどのような法則性をもって存在していたかについて、次に各時期の法量分布を参考にして考えてみたい。

第7図および第8図は、中河内と畿内の主要な遺跡から出土した第5様式～庄内式甕の器高と腹径の分布を示したものである。この2つの分布図によれば、庄内式甕の法量分布は大形から中・小形まで器高と腹径の比がほぼ一定のまま変化する極めて規則性をもつことがわかる。



第7図 第5様式～庄内式土器の法量分布図（中河内地域）



第8図 第5様式～庄内式土器の法量分布図(畿内主要遺跡)

これらは器形も画一的で個体ごとの個性が少ないものであることから、相同を基本的な関係に成り立っていることがうかがえる。それに対して第5様式土器は、大形、中形、小形などの法量による一定のグループには分けられるが、法量分布はばらつきがあって一見したところ不規則である。これらの関係と成形法の変遷を考え合わせると、第5様式では成形法において相似形態を中心とする規則性が認められるが法量分布にはそれ程の法則はないのに対して、庄内式で

は成形法は先のⅡ₃段階にみる「連続ラセンタタキ技法」の確立と逆円錐台の衰退において完成し、形態的には第Ⅲ段階になって相同を基本とする法則を備えた完全な土器様式が確立されるに至ったといえよう。従って、この両者の中間的なⅡ₂段階の相似傾向の胴内面を削る甕が出現した時期に、未だ量的には圧倒していたと思われる第5様式系土器が成形法の変遷をすすめるなかでどのような役割を果たしていたかが問題点となるのであり、胴内面を削る甕のなかで器高の割合が大きい古相の大形甕が逆円錐台部を残し精良な胎土の馬場川井戸60のようなものから暗茶褐色の庄内式へと変化するのか、あるいは別の系譜のもとに安満遺跡9地区井戸1例のような丈高の暗茶褐色の庄内式が出現するのか検討していく必要があると思われる。¹¹⁾¹²⁾

最後に、河内の庄内式には大形、中形が存在するが器高、復径が15cmを下廻るような小形の出土例がないのに対し、大和の庄内式には小形も存在していることは、同じように内面ヘラ削りを行なう甕を出現させた両地域の地域色とみられる。大和纏向遺跡における庄内式甕の誕生が、ミニチュア形を除く大形～小形の甕が厚手、平底のものから薄手、丸底のものへと移行する傾向が認められるのに対して、河内では大形、中形の順に薄手、丸底のものが出現するものの小形は最後まで庄内式に加わらないまま消失していく経過が認められる。このことも他地域への搬出量の差とともに今後の課題となる問題である。

4.まとめにかえて

これまで都出論文発表後の中河内の第5様式～庄内式土器について、都出氏の土器論に導びかれながら甕の成形技法の変遷観を述べてきた。その結果、基本的には第5様式的な分割成形法が確立していく過程としての西之辻I式～上六万寺式相当期を再確認する一方、鬼塚E地点出土土器の規則的な成形法からみた上六万寺式相当期の土器製作技術の完成度においては上六万寺式に若干の補足を必要とした。そしてこれ以後を成形方法の段階的な変遷観からみた第5様式末～庄内式古相段階の編年観からは、本稿の目的である北鳥池下層出土土器の位置づけについては幾つかの前提を必要とした上で第5様式系土器の最終末として庄内式への技法的影響を認めることができるか、あるいは短期間にタタキ技法と逆円錐台部の形状、平底と尖底、内面ヘラ削り等の諸要素が絡み合ったなかで内面を削る甕と共存する一つのグループであるのかについて議論する余地がある資料と考えられた。現状では、様式的に明確な一線を画するにあたっては胴内面を削る甕のなかで古相のものとの間には解決すべき問題点も存在することから、それが求められるのは、丸底化や内面の削りによる熱効率の向上などとともに、成形技法の変遷と相同形態への移行が完成した西岩田遺跡例他の庄内式新相段階にあると考える。

注

- ① 「河内古代遺跡の研究」 大阪府立花園高校地歴部 1970。
- ② 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」 考古学研究第20巻4号 1974。
- ③ 酒井龍一「和泉に於ける弥生式～土師式土器の移行過程について」『上町遺跡発掘調査概報』所収 和泉市教育委員会 1975。
- 関川尚功「畿内地方の古式土師器」『纏向』所収 檜原考古学研究所編 1976。

森岡秀人「畿内第5様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」『大師山』所収 関西大学文学部 1977。

森田克行・橋本久和「安満遺跡発掘調査報告書—9地区の調査—」高槻市教育委員会 1977。

寺沢薰「大和における第五様式土器の細別と二・三の問題」『六条山遺跡』所収 檻原考古学研究所 1980。

- ④ 明らかに強い2次焼成によって底面が赤変し、剥離が認められるものは、小形甕(b)8の一例であるが、平底でありながら煮沸形態においては丸底の甕と同様に底部を地面から浮かせて使用している点で注意される。また、正立不可の個体はおそらく全体の過半数に及ぶと推測される。これらの問題については、脱稿後西川卓志氏が同じ資料を用いて煮沸形態について論じた原稿を調査会ニュース編集者宛に寄せられていたことを知った。西川卓志「弥生時代甕形土器の外表面観察—東大阪市域出土資料を中心に—」調査会ニュースNo.18掲載予定。
- ⑤ 河内産庄内式甕については、層位的にも明らかでない点を含んでいることから除いておくが、破片観察の結果、口縁部では庄内式新相(60)や布留式古相(59・61)を含んでおり、胴部では総点数46片中、4~5本/cmのタタキメ19例、6本/cm以上のタタキメ27例であった。
- ⑥ 繼向1式あるいは曲川式とされる平底、厚手の甕。関川前掲③ 綱千善教「大和曲川遺跡出土の弥生式土器について」古代学研究第26号 1960。
- ⑦ 「鬼塚遺跡Ⅱ」所収 東大阪市教育委員会 1979。
- ⑧ 若江遺跡下層は昭和53年、芝ヶ丘遺跡は昭和54年東大阪市遺跡保護調査会ならびに同教育委員会によって調査。
- ⑨ 「鬼塚遺跡」 東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ 1975。
- ⑩ 胴部全体に叩きを行なった後、上縁部を若干折り返してこれをよりどころとして口縁部粘土を補充して成形するものが大半で、口縁外面の中程に接合痕が観察される。
- ⑪ 「上六万寺遺跡」 東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ 1975。
- ⑫ ⑦に同じ。
- ⑬ 厳密な意味での相似形ではない。逆円錐台部以上はむしろ自由な成形によって肩部や口縁部の形はそれぞれ異なっているが、全体の形状のなかに占める逆円錐台部の役割を表現するために相似概念を援用した。
- ⑭ 「馬場川遺跡発掘調査報告Ⅴ」 東大阪市教育委員会 1977。
- ⑮ 中西靖人・国乗和雄「大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴なう船橋遺跡試掘調査報告書」 大阪文化財センター 1976。
- ⑯ 上田町遺跡第2層出土土器、原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」 大阪府立島上高校研究紀要3 1965。最近では東大阪市西岩田遺跡において良好な資料が出土している。昭和53年度調査。一部を上野利明「西岩田遺跡出土の土師器について」 調査会ニュースNo.16 1980で紹介。
- ⑰ I₁~I₂段階とした馬場川井戸出土の胴内面を削る甕は、外面にタタキメを残しており、底部から粗い放射状のハケメをみる赤褐色のもので、これらと胴下半を密にハケ調整する暗茶褐色の庄内式とは系譜上連続するものかどうか不明である。一方、安満遺跡9地区井戸1には、暗茶褐色の胎土で粗密2種のハケメが認められていて、密なハケ調整の甕が馬場川井戸例と一部重複する時期に出現している可能性がある。
- ⑱ 前掲③

表注 第7図引用遺物のうち、繰向、安満、鬼塚E地点、馬場川井戸、船橋第9トレンチ土塙、上田町、西岩田の各出土例は前掲③、⑦、⑭、⑯による。また、東奈良と和泉豊中例は、「東奈良」 東奈良遺跡調査会 1979および「豊中・古池遺跡発掘調査概報そのⅢ」 豊中・古池遺跡調査会 1976による。第8図掲載資料の出典も同様。